

福澤諭吉の
宗教観
小泉仰

慶應義塾大学出版会

『福澤諭吉の宗教観』

(三〇八頁、三、八〇〇円、慶應義塾大学出版会)

小泉仰
こいずみ たかし

(慶應義塾大学名誉教授、文学博士)

私は三代目のキリスト教徒で、幼少期からプロテスタント教会に親しんできた。しかし日本文化にもとっぷり浸ってきたから、私の心と体の中で、いつもキリスト教文化と日本文化の奇妙なせめぎ合いを感じてきた。私が福澤諭吉の宗教観を見るとき、私のうちに深い共感と魅力の感覚と共に反発の思いを覚えて、一種の不協和音を感じ取るのは、私自身の精神構造からきている。そこで、福澤の宗教観を検討することは、実は自分自身の精神構造に光を当てているという思いもある。いわば福澤の宗教思想を通して、外から自分自身の信仰の在り方を眺めることができるというわけである。

福澤は「宗教の外に逍遙」するという立場を取り、外側から宗教を眺めて、「経

世」の上で宗教の社会的功利性を主張した。しかしそれぞれの宗教に対する彼の好悪を含めた評価は、時代と共に変わって行き、反発と接近を繰り返している。

彼の宗教に対する評価の変遷過程も、大変興味深い。彼は、いずれの宗教をも信仰せず、最終的に彼独自の此岸的、土人的宗教哲学に到達した。私の感じでは、日本の知識人の四割位は、福澤の思想にどこかで共鳴したり、惹かれたりするにちがいない。

本書の中で、私は第一章、第三章、第六章が自分でも特別面白いと感じている。第一章は、キリスト教が日本に到来して、宗教という概念そのものを飛躍的に変質させた経過を明らかにし、特に明治初期の明六社社員の宗教思想と福澤との共通

性および彼の宗教観の視点の特異性を明らかにした。第三章では、キリスト教に関するフランシス・ウエーランドと福澤との比較を試みた。これまでこの種の比較は、ほとんど無いのではないかと思う。第六章は、福澤の実学思想と宗教哲学との相克矛盾を明らかにした。私は、以上の三章に特に力点を置いて論じた。

一方、第二章は、二人の子息のアメリカ留学を機に、福澤が次第にキリスト教への嫌悪感を捨て、ユニテリアン・キリスト教へ共鳴していく過程を明らかにした。第四章は、拙著『J・S・ミル』(研究社出版、一九九七年)の中で、ミルとキリスト教の関わりおよび福澤への影響についての私の論究の二番煎じで、多少の付け加えをした章である。自分としては、全体として結構面白い本にできあがったと思っている。

なお、一言付け加えれば、福澤が『福翁百話』で展開した実学思想と仏教的無常観との矛盾を統一する論理を展開してくれたなら、彼は真実の宗教哲学者になれたはずだと思うが、このような「実なき学問」に嫌悪感を抱く福澤にこれを求めるのは、無理と言うものであろう。